

ストロベリードロップ、または檸檬をひとつ。NG集

・ストロベリードロップ、または檸檬をひとつ。

秒針の音が痛いほど耳に響く。それを懸命に無視しながら、カナンは椅子からわずかに腰を浮かせる。

「では、失礼しますね。ライカさん」

……」ち。

「やりましょう、ファーストキス」

ボールペンをくるくると弄るライカの手に、カナンはそっと自分の手を重ねた。

そこで、自分の指先がびっくりするほど冷えてることに気づく。しかし、ライカはそんなことは意にも介さず目を輝かせてカナンを見た。

「いいんでごぜえやすか？」

「……はい。ただし、キスはあまり人前で、かつ大人數とするものではありません。僕以外に提案するのは控えてください。」

「おお、そななでごぜえますね！ わかりやした！ 抽は生憎キスを知りやせんので……カナンさま、どのようにすればいいか教えてつかあさい！」

「いえ、ライカさんはこちらを向くだけで大丈夫です。あと、

口だけ閉じていてください」

「へ、へえ。それだけでいいんでごぜえやすか。閉じておきやす！」

口と一緒になぜか目も閉じたライカを見て、カナンの心臓はより一層うるさくなっていく。しかし、もやもやはいつのまにかふわふわとした熱に変わっていて、不快なものではなくなっていた。

むしろ、初めて感じる熱に、浮かされるような心地だ。冷えた指先が小さく震えるのに、頬のあたりはうつとおしいほど熱く、

正面からキスをしようとしたカナンの眼鏡が、ライカの鼻にぶつかり、唇の少し前で顔が止まる。

……どうしよう。

眼鏡に邪魔され失敗する、というのは割とファーストキスのお約束だったが、生憎カナンは、お約束がわかるほど恋愛小説を嗜んでおらず、さらに失敗をカバーできるほどの経験値も持ち合わせていなかつた。

結果、冷や汗をたらりとかきながら固まってしまう。

「……」

「これがキス、でございやすか？」

「……いえ。すみません」

ライカの問い合わせで我に返り、カナンがさく震える指で眼鏡をとると、またライカがぎゅっと目と口を閉じる。

先ほどよりも、心臓は不思議と静かで。その一方で頬から耳の先にかけてが自分でわかるほど熱くて。どうか、その熱がバレませんように、と願いながらカナンは触れるだけのキスをライカと交わした。

・レモンティーにミントを添えて。

「ね、ね、カンナさまも食べてみてつかあさい！」

「いや、ぼくは……」

「いいからいいから！……はい！どうぞ！」

遠慮しようとするカンナに、ライカはいちごをすくってすくいと  
カンナの口元に差し出してきた。その景色とライカの期待に満ちた  
表情に、カンナはどこかで読んだ恋愛小説の定番のシーンがフラッ  
シュバックする。

これは所謂『あーん』では？

「カンナさま……もしかして、いちごが嫌いでやすか？」

「いえ……。そんなにおいしいなら、ライカさんが全て食べては？  
と

思つて……」

「ダメでやす！」

半分本心、半分逃げでつぶやいた言葉は、勢いよく跳ねのけられ  
て思わず小さく目を見開いた。ライカは少し怒ったような表情でさ  
らにスプーンをカンナの方に寄せる。

「おいしいものを食べるのは幸せでやすけど……みんなで食べるの  
が一番おいしいんでやんす！エスプリの皆さんに拙に教えてくださ  
いやした！」

だから、とさらに押されて、カンナは根負けして口を開いた。  
ライカは慎重にカンナの口にいちごを運ぶが……。

「あ。」

べしやり、とカンナの丸眼鏡の下弦に、ライカの持つパフェスブ  
ンが激突する。クリームがたっぷりついたいちごももちろん眼鏡に  
べったりとついており、ライカの顔がサーッと青くなっていく。

「わあああ！すいやせん！すいやせん！今拭きやすね！」

「ちょ、ライカさん！大丈夫、大丈夫ですかから！いたつ」

ぎゅうぎゅう、と眼鏡を顔にめり込ませんばかりに拭くライカを  
なんとか止めようとするが、カンナの力ではライカを退けることは  
できず、されるがままになってしまいます。

しかし、乾いたナップキンで拭いても眼鏡のべたたは取れず、ライカは段々涙目になっていく。

「と、これやせん……わあどうしやしよう、べ、弁償しやす！」

「ライカさん落ち着いてください、濡れた布巾などで拭けば落ちま  
すので。一旦座つてください……」

結局、店員から濡れ布巾を借りて、ライカが塗りひろげてしまっ  
たクリームを拭き、その後眼鏡拭きでレンズを拭き上げてようやく  
カンナの眼鏡はきれいになった。

それを見てようやくライカは落ち着きを取り戻すのだった。